

「みのがみ」の歴史を想い、人生で一番輝いたことを大切に作る施設づくりを地域の人々と共に進めています

社会福祉法人喜望会理事長 小椋喜一郎

「杜から郷へ」 ー新たな展開の歴史

「みのがみの杜」が生まれたのは2012年のことです。幼な友達3人が何か故郷に恩返しすることはできないかと話し合った結果、最初「福祉文化講演会」を開催しました。市民の方々に自分の人生をみつめ直してもらったり、社会福祉の過去現在未来を考えてもらう場としてきました。そんな中から市の北部に高齢者の施設がほしいとの声があがりました。でも、社会福祉法人設立には自己資金がありません。そこで、地域密着型認知症対応のグループホームをまず創りました。

しかし、利用者の重度化、お金の問題による特別養護老人ホームへの移動、医学的見地からの看取りが困難、近くに住んでいるのに市民ではないために利用できない等々の問題を抱え、何とかしたいと思うようになりました。自己資金の問題は市と相談した結果、旧上牧小学校を利用することで何とか解決できました。「杜から郷へ」の言葉によって新たな展開がなされ、今後も地域福祉のために様々な展開を試みていきます。

団らんの場としての暖炉 ーまきの火は心を豊かにする

「みのがみの郷」の共同室には、まきストーブが備えつけてあります。かつて宮崎県の特別養護老人ホームを訪れた時、「いろり」が切ってありました。その印象が強く、また幼い日の我家での「いろり」のことも思い出し、「みのがみの杜」で設けようとしていましたが、火災の危険などの問題もあって、フィンランド産のまきストーブになりました。約100畳分の広さをあたためてくれるもので、冬はとても暖かです。そして、その火のまわりで人々が語らうことのできる場も生まれています。パチパチと燃える木の「ほのお」は、また人々の心を豊かにしてくれます。

それに加えて、まきストーブは冬場に万一停電しても寒さを防げるようにと「危機管理」でもあります。暑いのは何とかありますが寒いのはどうしようもありません。そんな時このまきストーブが役に立つと考えています。また、岐阜は「木の国」でもあります。間伐材は豊富で燃料にこと欠きません。暖かく心を輝してくれる存在のありがたさを思います。

365日毎日の食事は大きな楽しみ ー福祉避難所対策も兼ねて

近年特別養護老人ホームは食事を外注化している所が多くなりました。外注化によるメリット・デメリットは多々あると思います。しかし、「みのがみの郷」は郷の職員の手作りにこだわりました。

かつて教員として実習指導していた時、学生が施設の食事を取り消すものすごく文句を言われました。100食の中の1食でなぜこんなこと、の疑問がありました。また若者は利用者の方々よりたくさん食べるだろうにとの思いもありました。

「みのがみの杜」では朝の職員の大変さを考え、ご近所の食堂の方に来てもらって食事を作ってもらっています。「みのがみの郷」では、災害時の福祉避難所の役割も考えて「厨房（ちゅうぼう）」は広く作ってもあります。これで何とか「たき出し」も可能と考えています。

また、食べる事は人生の大きな楽しみでもあります。少しでもおいしいものをまた季節のものを考えると、自分のところのスタッフにお願いするのが一番です。さらに、ご近所の方々の採れたて新鮮な自家用の野菜などをいただき、とても感謝の「厨房」です。

「和紙」ではなく「美濃紙」 ー現代の天下一品

美濃紙は奈良時代に始まり、牧谷で生産が栄えになったのは鎌倉時代ともいわれています。この発達してきた理由は原料の楮（こうぞ）が豊富にあったこと、川の谷が浅くて水質がよいこと、舟の便が発達し、岐阜・名古屋などに搬出することができたことがあげられます。江戸時代は幕府や尾張藩の御用紙として、記録紙として用いられ最上品とされ、とりわけ障子紙は天下一品としてその良質を誇りました。全国の数ある和紙の中で「みのがみ」が和紙の代名詞として通用していたのです。そして、さらに「みのがみ」を有名にした人物がいます。1825年長瀬村の武井助右衛門は尾張藩の注文に応じ、夏場でも紙をすく技術をみがき、尾張の紙を一手に引き受ける豪商となっていきました。

現代の数ある特別養護老人ホームの中で、「みのがみの郷」は高齢者福祉の代名詞として「天下一品」の名を誇っていきます。

「足が大地に」 ー細かな配慮と心づかい

「みのがみの杜」や「みのがみの郷」は他の施設にはない特色があります。「杜」は廊下、居室、共同室全て畳が敷かれています。ですから、転倒してもクッションが働き、骨折事故はありません。「郷」はさすがに旧小学校だけあって廊下も長く畳とはいきません。しかし、各ユニットに入ると足元が何となく違うことに気がつきます。「郷」の方は、板の間に見えますが、実はその間にやわらかなクッション材を入れています。ですから板の間のような痛さありません。加えてこのクッションが骨折事故を防いでくれます。

高齢になると足元がおぼつかなくなりますが、「杜」も「郷」も足が大地につき、しっかりと守ってくれる「細かな配慮」がなされています。